

大震災 から9年

大口町は、東日本大震災発生後の平成24年4月から、大口町の人口約2万人と規模がほぼ同じ南三陸町へ毎年職員を1名派遣しています。今回の特集では、



名簿安置の碑



復興記念公園 祈りの丘へ登る途中から見た旧防災庁舎

被災地の復興と現状

3月11日(水)で、東日本大震災から9年を迎えます。自然の脅威と衝撃的な被害の光景は、今も私たちの心に生々しく刻まれ、誰もが毎年この時期になると自然災害の恐ろしさを感じ起こし、改めて日頃の備えを見直し、防災・減災意識を高めていることと思います。

大口町では、東日本大震災のあつ

た翌年、平成24年に総務省の要請により行政機能をサポートする職員が被災地に派遣され、翌25年からは町独自の判断で南三陸町に職員を派遣する支援を継続しています。昨年4月から1年間の予定で着任しましたが、「被災地の力になりたい」と志願し、来年度も継続して派遣職員となる鈴木里恵さんに、現地です実際に生

活した体験談を伺いました。

鈴木さんの南三陸町での仕事内容を教えてください。

―歴代の派遣職員と同じく、南三陸町教育委員会教育総務課で仕事をしています。震災で被害を受けた子どもたちに必要な学用品費等の援助、転入学や新入学生の就学関係、児童生徒や教職員の健康診断等の学校保健関係、特別支援教育関係等を担っています。

現在の南三陸町の復興の様子を教えてください。

―今年度の4月に生涯学習センター、9月に消防署が完成しました。また、仮設住宅で生活されていた方が年末までに全て退去され、住民の皆さんが全員終の住宅に移動しました。12月には皆さん商店街の近くに復興祈念公園が一部開園し、道路も通れるようになったところは増えていきます。南三陸町は大きく分けると志津川地区と歌津地区があり、復興に差があります。志津川地区中心部は比較的進んでいます。歌津地区はまだ工事には時間がかかりそうです。

防災意識の変化はありましたか？

―小さい地震は頻繁にあります。一度震度5レベルを経験しました。昨年8月4日(日)午後7時頃のことです。緊急地震速報のけたたましい音は今でも忘れません。鳴り始めて数秒で大きな揺れがきました。とても怖かったです。

防災訓練をしても、実際に大きい地震を経験すると足がすくんでしまつんです。その場にはたり込んでしまい、揺れが収まるのを待ちました。その時に、いつ起こるかかわらない地震に備えは必要だと再認識しました。起こってからでは当然ですが遅いです。

東日本 発生か

平成31年4月より、9人目の派遣職員として南三陸町役場に勤務した鈴木里恵さんに、9年たった現在の復興の様子を伺いました。



田東山（たつがねさん）



ひころマルシェ



今では押し入れの中のリュックにタオル、軍手、着替え等を入れて置いてあります。ペットボトルの飲料水や日用品、缶詰は期限が切れる前に購入するローリングストックを実践し、風呂の水をある程度ためておくことを心がけています。これでも少ないと思いますが、小さな意識でも役に立つことはあると思います。自分自身が最低限でも安心する用意をしておくのが大切です。

南三陸町に関わって感じたことはなんでしょうか？

―南三陸町には、大口町にはない山や海があり、自然の恵みもたくさんあります。しかし、牙となる脅威をもろに受ける場所です。昨年、10月12日の台風19号でも、南三陸町内では土砂崩れや低い土地の浸水被害等がかなりありました。大口町では津波が起る海も、土砂崩れを起こす山もないので災害はテレビやイン

ターネットなどの媒体を通してしか実情を知ることができませんでした。しかし、9年前の震災は映像だけでなく、愛知県でも揺れを感じるほどに大きなもので遠くの地で起こった震災ではなく「同じ日本国内で起こった震災」という意識になりました。目を背けることはできません。現地ですんだこと、行政職員としての防災の心構えは？

―南三陸町に入った時にすぐに気付

くのは、建物のほとんどが真新しいことです。ということは、そこに住む人たちが働いている人たちは、津波で家や職場が流出してしまったということ…。ゼロからの出発です。職員の皆さんも、震災以前の書類等がほとんど残っていない状態から出発しています。

震災から丸9年がたち、ついに10年目に突入します。私たちの地域にも南海トラフ地震が30年のうちに必ずくるといわれています。

まずは自分の命をどう守るか、それから近くにいる人と助け合い、それをどんどん広く繋げていく。これが一番の備えだと思います。

南三陸町のホームページがリニューアルされ、未来に向けた取り組みが紹介されていました。

―9月に入谷地区で「ひころマルシェ」というイベントに参加しました。大口町でいう「ふれあいまつり」のようなものですが、ちょっと違います。南三陸町だけでなく、近隣市町村でハンドメイド作品を作っている方、地元食材を使ってレストランやカフェを開いている方、自家栽培で育てた母国の珍しい野菜を売りにきている外国の方、音楽活動をしている方が集うマルシェを年に2回お

こなっているそうです。地区ごとに、肩の力を抜いて出店できるような場でした。職業も多様化し、若い方が多いと感じました。地元で活動していて、もっと自分の作品を見てもらいたいという方は多いはず。そんな機会を大口町でも増やせたらいいと思います。

若い人たちも地域を盛り上げようがんばっているんですね。地域のコミュニケーションは災害時の心強い味方になると震災後、たびたびメディアで取り上げられています。

では最後に、南三陸町の魅力は？

「やっぱりタコ、カキ等の海産物です。本当に美味しいです！特にカキ。実は苦手だったんですが、南三陸町のカキで食べられるようになりました！南三陸町役場では、実家が漁師という職員さんも多くて、イクラやカキをいただいたことがあります。高級食材なのでとても驚きました。」
「ありすぎて買うものじゃない」という言葉は衝撃でした。

それから、歴代の派遣職員がお世話になっている「松原食堂」のおかみさん。恥ずかしがり屋なので写真を撮らせてもらえないんです（笑）3月末に南三陸町へ入り、一緒に来ていた母親と夕食を食べに行きまし

た。海の近くにお店があるので、元あったお店は津波で流出してしまっただんですが、可愛い笑顔で迎えてくれます。震災当時の話はもちろん、大口町の歴代派遣職員との思い出話を教えてもらいました。

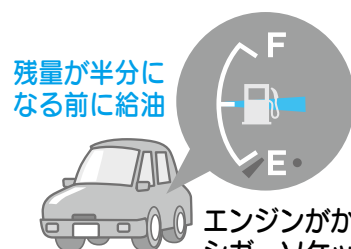
おかみさんだけでなく、南三陸町の方たちには、前代末聞の震災に遭遇したのに、悲壮感に包まれるのではなく、しっかりと前を向いて、次に進もうとしている方が多いです。

美味しい食べ物、美しい海や山の景色、たまにカモシカやタヌキ、鳥など動物の姿も…。復興に向けて歩み続ける南三陸町へぜひ遊びに来てください！

取材にて

令和元年も自然災害が頻発しました。

8月は長崎県から佐賀県、福岡県の広い範囲にかけて発生した九州北部豪雨。9月は関東地方に上陸したものととしては観測史上最強クラスの勢力で千葉県を中心に甚大な被害を

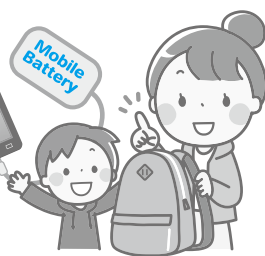


大口町 戸別受信機



エンジンがかかればシガーソケットを利用して充電ができます。

※シガーソケット専用充電器が必要です



もたらした台風15号。10月の台風19号は、長野県、関東甲信地方、東北地方の広範囲で大雨となり、阿武隈川や千曲川の堤防が決壊・氾濫するなど甚大な被害をもたらす災害が相次ぎました。

自然災害は時として想像を超える力で襲ってきます。今回で7回目となる被災地からの特集で、携わっていただいた9名の職員が口をそろえているのは災害が起きたら「まずは自分の身は自分で守る」ということでした。いつ何が起こっても慌てず行動できるよう、いざというときのためにコミュニケーションをしておくことが重要だと思いました。

20年前から防災に関心を持ち、研修会や被災地支援のボランティア活動を経験されている中小口地区にお



▲「空腹は我慢できてもトイレは我慢できませんから」と非常用トイレの説明をする川橋さん

住まいの川橋朝次さんは、備蓄は飲料水や食料、日用品のほか、正しい情報を確保するための機器と、非常用トイレを用意しておくことがとても重要だとおっしゃっていました。いざというとき、自分はこのような行動をとったらよいのか、またどのようにに家族を守ったらよいのか、改めて確認してみましよう。平時の「備え」すなわち「想定外の想定」が、有事の際も平常心で最善の対処をおこなうカギとなります。各家庭で防災意識を高めましよう